病院の面会制限はなぜ続くのか「この記事が見直すきっかけになれば」

12/22 毎日新聞

新型コロナウイルスが感染症法上の 5 類に移行して 1 年半以上を経た今も、多くの病院が「15 分まで」「親族 2 人まで」などの面会制限を続けている。ところが感染拡大予防のためマスク着用やワクチン接種についてわかりやすく発信を続けてきた感染症専門医で大阪大大学院医学系研究科感染制御学教授、忽那賢志さんは今、むしろ面会制限の緩和を呼びかけている。その真意は。【聞き手・小国綾子】

「面会ルールはコロナ前に戻しました」

――病院の面会ルールを見てみると、「15 分以内」など時間の制限、「家族のみ 2 人まで」など人数の制限、「個室か談話室のみ」など場所の制限が多いです。中にはまだ「面会全面禁止」をうたっている病院もあります。忽那さんのいらっしゃる大阪大学病院はどうですか。

◆大阪大学病院では今年 8 月、面会方法を「コロナ前」に戻しました。つまり、家族に限らず 16 歳以上の人なら誰でも面会できます。回数や時間、人数などの制限もなく、大部屋での面会もできます。

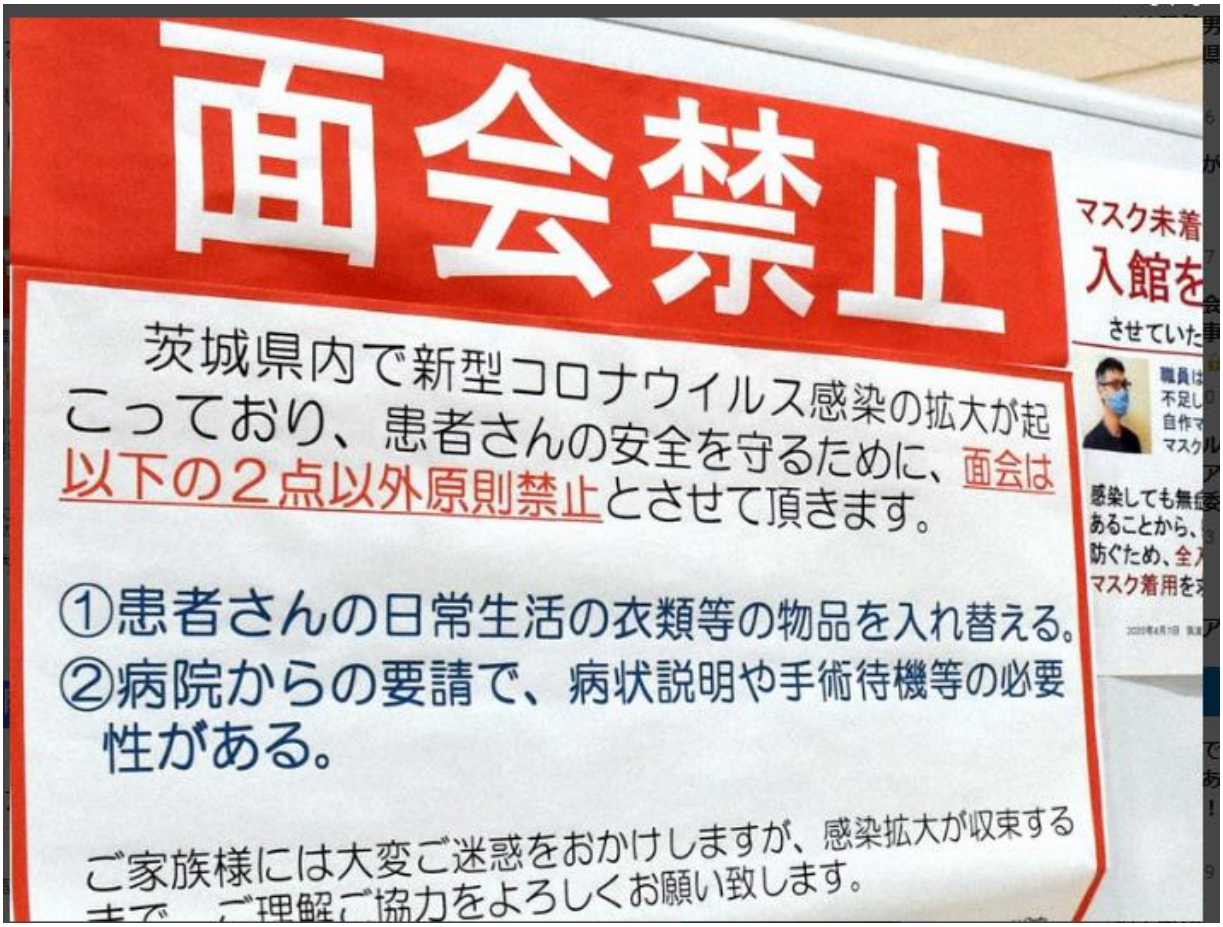
ただし発熱や喉の痛みなどの症状がある人は面会しないようお願いしています。面会時の飲食禁止とマスク装着もお願いしています。面会による感染の持ち込みはゼロにはできませんが、今のコロナの病原性や重症化率、致死率などを慎重に検討した上での判断です。

患者の QOL とのバランスを

――忽那さんは、感染拡大期にマスク着用やワクチン接種を強く呼びかけていらっしゃいました。一方で、面会条件の緩和についても、かなり早い時期から積極的でしたね。

◆大阪大学病院では 2020 年、コロナ禍で面会を原則禁止にしましたが、21 年 10 月にはワクチン 2 回接種か PCR 検査の結果が陰性であることを条件に、面会を再開しました。オミクロン株の感染拡大が落ち着いた 22 年 6 月には、面会条件を緩和し、「1 日 1 回 1 人まで、

30 分以内、デイルーム（談話室）で」としました。当時はまだ全面禁止の病院も多かったため、注目されました。大阪大学病院の条件緩和を受けて、面会を再開した病院もいくつかあったようです。



大阪大学病院では臓器移植を待つ長期入院の患者も多いため、家族や知人にまったく会えない精神的なストレスはとても大きい。感染リスクだけを考えれば面会禁止が一番安全ですが、「ゼロリスク」を目指し続けるのではなく、感染予防と患者さんの QOL（生活の質）のバランスを取るべきだと考えました。

20 年の流行初期は、院内に一人でも感染者が出ると大変でした。重症化し亡くなる人も多かった。でも今は、ワクチン接種も行き渡り、感染しても適切な治療を受ければ重症化する人は少なくなりました。患者が面会によって得られるメリットの方を優先できる状況だと考えています。

日本で行動制限緩和が遅れたわけ

――22 年に面会制限を緩和した時点ですでに、「家族のみ」という条件をつけていませんでしたね。面会について、今なお「家族のみ」を掲げる病院が多いです。なぜ、家族に限らなかったのですか。

◆それは、患者さんが最も会いたい人が、家族に限らないからです。身寄りのない患者さんにとって、面会を「家族のみ」とすると、誰にも会えなくなってしまいます。

――海外ではとっくに「面会制限」などないのに、日本は行動制限の緩和が遅い、という指摘もあります。

◆それには事情があります。日本では感染初期に対策を徹底したお陰で重症者や死亡者

をかなり抑えられました。一方、感染者も他国より少なく、特に高齢者の 3 人に 2 人はまだ感染していません。だから、緩和もゆっくりにならざるを得なかったのです。

昨年 5 月、コロナが 5 類感染症に移行した時、それまでの面会禁止から、人数や回数、時間に条件をつけて面会を再開した病院が多かったようです。しかし、それ以降は特に、さらに緩和を検討するようなタイミングがなかったため、ずっと同じ条件を続けている病院が少なくないのでしょう。

面会のメリット優先できる

――厚生労働省は 20 年 10 月以降、入院患者の QOL を考慮し、感染対策をした面会方法を例示するなど、面会制限の緩和を呼びかけてきました。しかし、厚労省に緩和の指示権限はなく、判断は各施設管理者に委ねられています。そのため今なお、時間や回数、人数などを制限したままの病院が多いようです。

◆病院は重症化リスクの高い人が多くいる場所ですから、一般社会よりは慎重に緩和すべきですし、施設によって事情が異なるため一概には言えません。それでも、かつて致死率 5%だったコロナが今では 0・2%。リスク評価に応じ、感染予防対策も柔軟に変えていく必要があります。

親しい人との面会は患者のケアにも重要です。長く家族に会えないことで、せん妄（意識の混乱）状態になる患者もいます。面会は患者さんの QOL にとって非常に大切なんです。

今の感染状況を考えると、患者さんが面会できるメリットの方を優先できると考えています。この記事が、面会制限を見直すきっかけとなってほしいです。

人物略歴　くつな・さとし

新型コロナウイルスワクチンの 4 回目接種について話す忽那賢志大阪大教授＝スクリーンショットから

1978 年生まれ。山口大医学部卒。感染症専門医。国立国際医療研究センターを経て、2021 年より現職。感染症の正しい情報を伝えるため、ウェブ上で発信を続けている。